市民談話室

原稿募集

9月1日号の原稿を募集します。皆さんが日ごろ考えていることや身近な出来事など、気軽に投稿してください。字数は400字から500字程度とします。あて先は、〒950-12 白根市大字白根1235 白根市役所 企画調整課 広報広聴係（☎373-2111㈹333）です。

羽ばたいて 白根北中学校に望む

五十嵐 肇さん（西酒屋・13歳・中学生）

緑輝く広い大地、光あふれるこの白根市に、来年大きな学校が誕生する。「白根北中学校」である。

僕はこの白根北中学校に大きな関心を持っている。それは、大鷲、根岸、大通地区からの生徒が統合するからである。初対面の人がいれば緊張する。しかし、逆に期待がある。まるで揺り篭が揺れるかのように、僕の心は弾む。そんな中、日々着々と工事が進む。校舎の完成が待ち遠しい。

校舎はいわばまだゼロ歳である。だからその生徒である僕たちが育てていかねばならないと思う。自分たちで考え、実行し、自分たちの手で校舎を作っていきたい。そして市内の中学校で一番活気のある中学校にしたい。

人間に一つしかない「生命」。その天敵である「交通事故」。そこで一つ要望なのだが、自転車通学ができる安全な歩道を作ってもらいたい。それと、万一のときのために公衆電話も作ってもらいたい。

未来へ続く二〇〇〇年。いわば僕たちの時代。そのためにも中学校で学力や心身を養い、大きく羽ばたいていきたい。明日という未知と希望にあふれた大空へ向かって。

▶建設が進む白根北中学校

白根神社の春祭り 幼い日を思い出す神楽舞い

保倉マチ子さん（桜町2・60歳・飲食店）

一歳半を過ぎたばかりの孫を背に、白根神社の春の夜祭りに出掛けました。明日は五月に入ろうという三十日の夜はよく晴れていました。境内は家族連れで賑わい、夜店も繁盛していました。その中を通り抜け、拝殿の大鈴を振ると、背中の孫は「オーオー」と初めての経験に奇声を上げていました。拝殿の中では二人の神官が神楽を舞い、見物の人も数人座っていました。私は孫にもこの神楽舞いを見せてやろうと思いました。自分の子供たちとは、仕事の忙しさのために一緒に見る時間などなかったことを思い出しながら…。

一の町で生まれ育った私の子供時代の神社は日ごろの遊び場であり、自転車の練習場でもありました。そのころの神社は、広場に特設のやぐらが立ち、日暮れ近くまで舞いがあったものです。特に最後のスサノオノミコトのおろち退治で稲田姫を助ける舞いが待ち遠しかった記憶があります。神話に基づいて舞った踊りなのでしょうが、大蛇を倒す場面よりも、愛しいわが娘を大蛇のいけにえにしなければならなかった姫の父母の愛情、悲しみ、苦しみで涙するしぐさのところが、よみがえります。

孫に神楽を見せようとして、すっかり五十年前の幼いころの思い出に浸った一時でした。

市民文芸

短歌

桃名人と慕われし友人の童柩車
桃熟れそめし畑中の道　中村　京

寫りたるバックミラーの老いし顔
これがおのれかこたた寂しむ　根岸　資郎

腰を曲げ杖にすがりて散歩しつ
飛び散るタンポポの行方見つむる　小出よしの

川柳

波風を我慢の舟にのせて置く　田中　成子

七光り継ぐ子に早い狸り椅子　田村　恒夫

気が早い長野五輪の盆踊り　中村　尚治

母の香よ離れて行くほど濃く匂う　西条　ムラ

停電の暗闇で呼ぶ女房の名　早川　英男

紫陽花に佇む女の襟侘し　山岡　フミ

ことあればパートの首はすぐ切られ　米野　光雄

一石の波紋で揺らぐ永田町　吉川　彰

嫁不足宅にも欲しい鯉のぼり　荒木　イマ

八月十五日の思い出 あれから四十五年

斉藤愿一さん（古町・78歳・無職）

昭和二十年八月十五日の朝のラジオで、本日天皇陛下の重大放送があると聞きました。私は昼のニュースを燕駅で聞いたのですが、そのときは電波妨害のため、何が何だかよく分からないまま帰りました。しかし、まさに陛下の休戦の大詔が降ったのです。それを敗戦という感じにはなれなかったのが当日の心境でした。私は当時、新飯田村役場で兵事戸籍係を担当。ほかに在郷軍人分会長を拝命していました。昭和二十二年に公職追放、二十七年に解除されました。

無条件降伏調印後、進駐軍本土上陸とともに、占領政策が始まりました。武装解除、財閥解体、家族制度の崩壊。保存していた昭和二十年八月十五日前後の約一カ月の新潟日報を取り出して見ていると、当時のさまざまなことが思い出されます。もちろん生活物資は少なく、統制経済で配給制でした。サツマ芋のツルを食べ、たばこは紅葉の葉やトウキビの毛を乾燥して吸った時代でした。政府は一軒一坪農業で国民皆農運動を起こし、食糧増産を指導したのでした。

あれから四十五年過ぎた現在は生活物資はあり余るほど豊富になり、政治経済、文化、スポーツなど、当時からは想像さえできない時代となりました。まさに世界の経済大国として国際平和への貢献と憲法論議を尽くしています。五十年後には、やはり想像もできない時代が来るのではないでしょうか。

戦没者の招魂祭に寄せて 戦争の悲惨さを忘れずに

平松キミさん（南新町・75歳・無職）

青葉、若葉の緑が目に染みる五月九日、十日。二日間にわたって招魂祭の前夜祭と本祭が厳かに行われました。神殿には戦没者の写真が飾られ、お花も供えられました。祭りが始まるや太鼓の音が全身に染みわたり、涙が出るほどありがたく思われます。このような行事の行われますことを、心から感謝申し上げております。

あまたの写真の中から夫の写真を見つけ出し、また、ほかの人々の写真をも拝見し、過ぎし遠い昔が懐かしく思い出されます。しかし、月日とともに自分も年を重ね、戦争の惨めさ、悲惨さも忘れ去られるのではないかと心配です。昨年は私たちの仲間十五人のうち三人が他界され、寂しい日々を送りました。

幸い、近くに住んでおられる九十四歳のお針の先生が元気ですので、遊びに行ってはいろいろとお話をお聞きし、心の励みにしております。そしていつまでも平和で穏やかな毎日が送られるように心掛け願いつつ、故人のめい福を祈っております。

中国残留孤児に思う 「大地の子」を読んで

近藤ユリさん（中央通・37歳・主婦）

山崎豊子著の「大地の子」を読んで、中国残留孤児の方々の生き様が、あまりに衝撃的だったのに驚かされました。国の方針で渡満し、戦争の犠牲になり、中国に置き去りにされて、小さいときから「小日本鬼子」といじめられた何の罪もない子供たちがいたことは知っていました。しかしこの本を読んだことによって、戦争の残した傷跡が、あまりに多くの人の人生を変えたことに腹立たしさを覚えます。

選ばれて日本に帰って、テレビの前で「お父さん！」「お母さん！」と親子対面して抱き合えるのはまだ幸せな孤児たちです。読み書きができないで自分の名前も書けず、生涯貧しい農村で酷使され、肉親捜しができないで死んでしまう人もいます。テレビで映し出される姿は十歳は老けて見えます。孤児と呼ぶにはあまりにも年を取り過ぎています。記憶も薄らいでいることでしょう。その親となればなおさらのことです。

早く、一刻も早く解決しなければならない問題ではないでしょうか。

俳句

金魚売り寺より水をもらひきし　堀内ナナ子

誤字ばかり目につく日記曝しけり　安沢　飛浪

新築の家に吹き入る植田風　木村　トリ

傷心の我に踊子草踊る　公条　雪夫

春愁や少しこだはること一つ　成沢　素明

よそ事を考へてゐてレース編む　和泉　伸子

失せ植瓦の右見左見捗らず　猪股　南魚

やうやくに灯のとゞきゐし白牡丹　五十嵐寛吾

黄牡丹の色ほんのりと解けけり　小林　すみ

少年のやうに草笛吹く夫　豊木サダ子

（以上大風会）

岸に着くまでの波紋が小五月蠅い　今井　七郎

叩かれた亡父の拳が懐かしい　織田　セツ

母の手を探り求めている水子　後藤マサノ

ポケットベル夫を探るこれも愛　佐藤トミノ

断腸のおもいで通夜の鐘叩く　佐藤　ヨキ

うぬぼれもここまでくると馬鹿に見え　高橋祐四雄

叩いたら証券バブルの雅芝居　竹石　甚五